

令和4年度

事務所だより 第2号

令和4年7月12日
益田教育事務所



「 雑感・・・ 」

学校教育スタッフ 企画幹 瀬戸 洋

教育事務所勤務2年目になりました。学校に勤務していた時には、「大変だな」「でも何とかかなるだろう」という認識だったいわゆる「教職員の人材不足」に自らが直面することになりました。寝ても覚めても「どこかに学校で勤務してくれる人がいないかな」とこればかりを願っているというのが実情です。現況はかなり深刻で、多くの学校にご迷惑をおかけしています。また、無理を言ってたくさんの方に様々な形での勤務をお願いし、学校を支えていただいています。

これは益田管内に限られた事ではありません。島根県内、ひいては全国で生じている教育界の根幹を揺るがす懸案事項です。先日も全国版の報道番組で教員不足について報道され、松江市を走るラッピングバスも取り上げてもらっていました。これらは教職希望者の増加にすぐには繋がらなくても、社会問題として認識してくれる人が増えるという面では大きな効果があるのではないかと思います。特効薬は無いかもしれませんが、次の3方向から打開していく努力を続けなければいけないと思っています。

①現在お勤めの方がこれ以上疲弊しない環境を作ること

②学校で勤めたいという次世代の人を増やすこと

③定年後も今しばらく現場を助けていただける方を増やすこと この3つです。



これらの具体策について行政も学校現場も地域も保護者も、皆で考えていく必要があります。私たち行政もできることは何でもやる意気込みで、負担軽減に繋がるように研修や業務の見直しを図っていきます。あわせて学校現場においても今一度、できることはないか保護者や地域を巻き込んで議論いただき、見直しをお願いしたいと思います。

①についてはコロナ対策で各種学校行事等の実施がかなり精選されてきました。さらに各活動のねらいを明確にし、効率化、スリム化を進める必要があります。これまで行ってきた「当たり前」を見直すことを是非、進めていただきたいと思います。登下校の見守り、放課後の電話対応、再生資源回収等のPTA活動…、どれ1つとっても無駄なものがないことは承知しています。ですが、皆で危機感を共有して痛み分けをすることで、少しずつ変革を積み重ねることが必要です。②についてはやはり授業を充実させ、わかる喜びを子どもたちに与えることが教職へのあこがれに繋がっていくと考えます。いろいろなものを削っても、最優先されるべきは授業です。全ての授業でとはいいません。1日に1時間でも、得意な1教科だけでも、授業者が笑顔で子どもたちに向かえるような授業を目指していただきたい。そのためのお手伝いは指導主事一同、精一杯させていただきます。そして、③については長年にわたるご勤務を終えた後でも、現場を助けていただいている方々へ感謝の気持ちを言葉でお伝えいただくことが肝要です。

管理職のみなさんだけでなく、皆がお互いの勤務内容について知り、声をかけあう職場にしていただきたいと思います。お互いの立場を理解し、支え合うことがこれまで以上に求められます。

お願いばかりで申し訳ありません。5年後、10年後の学校を守るために、皆の力を、知恵を集結させて、ピンチをチャンスに変えていきましょう。

学校教育スタッフから ～生徒指導 編

生徒指導は全ての教職員が担うものです。いじめ、不登校、問題行動や危機等、生徒指導上の諸課題は多岐に渡ります。生徒指導を進める上でどんな力が求められているのでしょうか。第2号では、生徒指導の視点から、「児童生徒理解」「授業づくり」「集団づくり」に関わる話題を取り上げてみました。個々の教師だけでなく、「チーム学校」としての生徒指導力の向上につながるヒントになれば幸いです。

学校という場所が、子どもたちにとって安心・安全な場所であること、そして、子どもも大人も笑顔で過ごせる場所であること。皆で力を合わせ、そんな学校を目指していきましょう。



「初期対応」を動かす ～アセスメントシートの活用を通して

益田市教育委員会 派遣指導主事 岩崎真人

益田市ではSSWの方々と意見を出し合い、不登校児童生徒への対応を考えるためのアセスメントシートを作成しました。機を逃さない初期対応を行うため、このシートは各学校で行われるケース会への活用を想定して作成したものです。夏休みには、アセスメントシートを用いたワークショップも計画しています。(シートはこの会で紹介をします。)1枚目は欠席日数が増えてきた児童生徒の一覧表です。学校内、学校外の資源のうち、今現在どんな支援を受けているのか、今後どんな支援を受けられそうかチェックをします。2枚目はケース会時に必要な情報をまとめるためのシートです。2枚のアセスメントシートを用いてケース会を行うことで、この時点でどのような支援が考えられるかを話し合っていきます。ケース会は浜田教育センター作成の「次へのヒントが見つかるケース会議」の手法をベースに、短時間で具体的な支援策を出せる会にしていきます。

学年	学年	氏名	記入日までの欠席日数	休校期間中の欠席日数	児童が理由で欠席になること	校内での対応		学校外の連携		関係機関の連携	
						校内での対応	学校外の連携	関係機関の連携	関係機関の連携		
1											
2											
3											

ケース会開催の目安としては

- ① 欠席が3日続いたら ⇒ 家庭訪問の実施
- ② 欠席が合計10日になったら ⇒ 校内ケース会の開催の開催
- ③ 欠席が合計20日になったら ⇒ 校内+SC or SSW or 市教委担当者でのケース会
- ④ 欠席が合計30日以上になったら ⇒ 校内+SC+SSW+外部機関でのケース会

大事なことは、アセスメントシートを活用し、目の前の子どもの「背景」、つまり本人の願いや家庭の実情を理解すること。そして、そのアセスメントシートを用いてケース会を行うことで、実態把握と対応方針について参加者同士の共有が可能になり、チームで対応にあたるができるということです。「初期対応を組織で動かす体制づくり」を目指していきましょう。



○島根県教育センター浜田教育センター「次へのヒントが見つかるケース会議パッケージ」

https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/kikan/hamada_ec/kenkyu/kiyou_houkoku/R3kyouso_kenkyu.html



未然防止につながる授業づくり～「授業チェックリスト」の活用

津和野町教育委員会 派遣指導主事 渡邊純一

『令和4年度版 授業チェックリスト』をお手元にご準備ください。

(EIOS-しまねの教育情報 Web からダウンロードできます。)

授業づくりで大切にしたいポイントがわかりやすくリスト化されています。この春に県教育指導課から出された新しいもので、「なるほど」「やってみよう！」と思える素敵な資料で、たいへん重宝しています。

さて、このチェックリスト、授業改善の道標でありながら、その先に「仲間と一緒に授業を楽しみ、安心・安全な学びの場で、笑顔があふれる児童・生徒の姿」が見えてきます。授業改善は集団づくりにも良い影響を生み、いじめや不登校に対する積極的な未然防止の取組になります。リストの中の1つの項目を例に下線部を生徒指導の視点で見てみましょう。

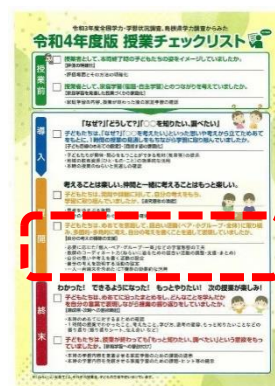
- 子どもたちは、めあてを意識して、①話し合い活動(ペア・グループ・全体)に取り組み、多面的・多角的に考え、自分の考えを書くことを通じて表現していましたか。
・教師のコーディネート力(ねらいに迫るための話し合い活動の②調整・支援・まとめ)

①活動の場面での子どもたちの関わりの様子はどうでしょう。

- ・輪に入れない(入ろうとしない)子はいないか。
- ・他者の考えに関心をもち、相手を思いやった言動がとれているか。

②教師はどんな関わりをしているでしょう。

- ・子ども同士をつなぎ、関わりを生んでいるか。
- ・言葉を引き出したり補ったりすることで、子ども同士が分かり合える支援ができていますか。



また違った使い方として、「授業」を学級や部活動、掃除の縦割り班などの集団に置き換えると、仲間づくりの道標にも見えてきます。教師からの一方的な指導ではなく、子どもが中心となって育つ集団を育てる上で大切なことが見えてきます。この機会に「授業チェックリスト」を有効に活用してみたいかがでしょう。

○島根県教育センター「令和4年度版授業チェックリスト」<http://eio-shimane.jp/class-making/>

安心・安全・みんなの学校 ～特別活動 編



学校教育スタッフ 指導主事(兼)生徒指導専任主事 福原 奈美

生徒指導の究極の目標は「自己指導能力の育成」です。自己指導能力とは、「その時その場で、どのような行動が適切であるか、自ら考え、自ら決めて実行する力」と言い換えることができます。子どもたちがいずれ大人になって社会に出た時、周りのみんなと上手に関係を作り、その中で自分の個性やよさを十分に発揮することができるように、子どもたち一人一人に、自己指導能力を育成していくことが求められています。

生徒指導にとって重要な教育活動の場

特別活動は、集団での生活実践を通して、児童生徒の個性を伸長するとともに自治的な能力や社会性を育てる教育活動です。こうした目標を持つ特別活動の取組は、児童生徒の健全育成を目指す生徒指導の実践そのものです。

特別活動の指導において重視したい指導・支援には、次のようなものがあります。

- ①児童生徒に「自己存在感」を与える
- ②教師と児童生徒の信頼関係及び児童生徒の「共感的な人間関係」を育てる
- ③「自己決定」の場や機会をより多く用意し、児童生徒が自己実現の喜びを味わうことができるようにする

上記①～③の「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定」は、『生徒指導の3つの視点』に外なりません。こうしたことから、特別活動は教育課程において生徒指導の中核的な役割を果たしていると言えます。

学級活動の充実

学級活動の充実を通して学級経営の充実を図ること、これは生徒指導の充実の基盤になります。年々益田管内でも、学級活動に力を入れ、取り組まれている学校が増えており、生き生きと活動する子どもたちや先生方の姿を、たくさん見させてもらっています。

よい集団を育てるのが特別活動です。心の拠り所になるような集団、苦楽を共にできる集団、そんな集団の中で子どもたちは育っていきます。仲間と共に頑張る、そんな子どもたちの姿に、私たち大人も元気がもらえ、教師として成長させてもらえます。ぜひ、特別活動の充実を目指していきましょう。



○国立教育政策研究所「生徒指導リーフ」(Leaf. 6) <http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf06.pdf>



自分が子どもだったら『安心して座って(参加して)いられる授業』がいいな。」と思います。ずっと説明が続くのはなんといっても退屈だし、長い説明の後に

「さあ、やってみよう!」

と言われたって、説明はよくわかんなかったし、“…どうやればいいのか?!”状態で授業が進むのは、ちょっと勘弁です。よくわかっていない、まだうまくできない状態で

「じゃあ、やってみよう!」

と言われても、不安の方が大きくて、とてもじゃないけど安心していただけません。

まして、

「じゃあ当てるぞ?できた人!」

なんてことになると、“できないよ～どうしよう…”としか思えない…。

「えっ?まだ出来ないの?出来ないのかぁ…(ダメだなぁ…)」みたいに言われているようで…。

『教室は間違ふところだ!』と言われるけれど、『試行錯誤しながらみんなのできるようになる教室』がいいです。みんなと一緒に確認しながら一步一步進んでいける、そんな授業がいいな、と思います。

どうしたらそんな授業になるか、安心していられる授業になるか、日々考えているわけです。

(M)

